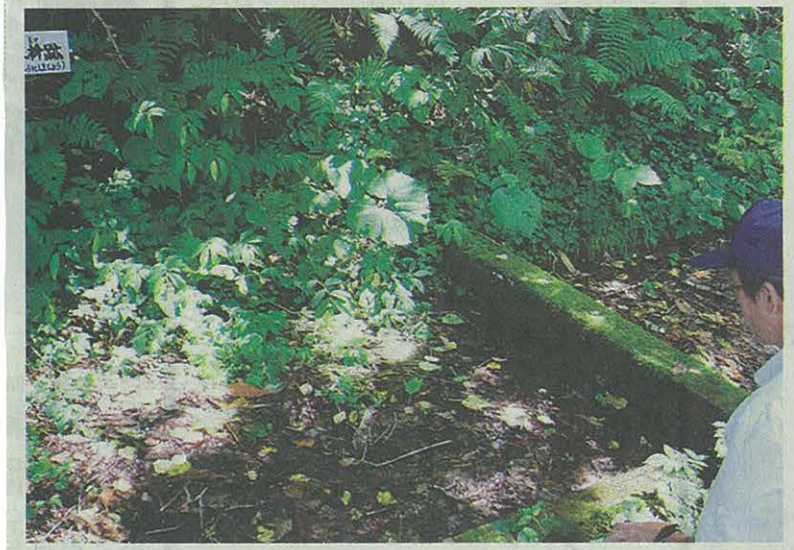
人と暮らしの伊那谷遺産〈33〉

木曽山用水（塩尻市―伊那市上戸、中条）

先人の知恵 伊那谷潤す



日本海へ注ぐ信濃川支流である奈良井川の源流・白川から取水し、一九六八（昭和四十三）年まで、権兵衛峠を越えて伊那谷に農業用水を供給した。

中央アルプス北部の経ケ岳（二、二九六メートル）山麓扇状地の四村（与地、大萱、中条、上戸）は江戸時代、幕府領で、高遠藩が水利権を持つ小沢川からの取水ができなかった。水争いは一七三〇（享保十五）年ごろから明治初期まで及んだ。

用水造りは一八八〇（明治十三）年に開始。三年後に完成し、上戸・中条村（現在の伊那市）を潤す約十二キロが木曽山用水と呼ばれている。

権兵衛峠は日本海と太平洋の分水嶺。峠には、用水を流れる水量を測る「井筋水桝」が残る。この桝をあふれた水は木曽谷に戻っていった。

日本海へ流れるはずの水が伊那谷を潤した後、太平洋へ向かう。貴重な水を確保しようとした先人の壮大な計画に感心しながら、峠にある分水嶺碑を見詰めた。（札木良）

平成26年1月16日掲載
中日新聞／朝刊／19面（南信）